

ある弁理士の子連れロースクール留学



会員 龍神 嘉彦

目次

はじめに

1. 無謀な決心
2. 旅の支度, ワン・ツー・スリー
3. トランク5つでレッツゴー!
4. シリコンバレー狂騒曲
5. ロースクoolの授業
6. アメリカで就職するぞ!
7. アメリカで働くこと
8. アメリカの特許事務所
9. 出産と, テロと, 司法試験と
10. 帰国して思うこと

.....

はじめに

昨年の春, 6年間のアメリカ生活にピリオドを打ち, 帰国しました。最初の1年間は, カリフォルニア州サンタクララ大学ロースクoolに留学し, 卒業後は, ニュージャージー州の通信関係の研究所で知財・法務担当として5年間働きました。完全な私費留学で, しかも妻と幼い2人の娘を連れての渡米。途中, 滞在費が尽きたり, 現地で三女が生まれたり, テロや炭疽菌事件, ニューヨーク州司法試験への挑戦と, まさに日々戦いの連続でした。「海外留学」というきらびやかな言葉の響きとは裏腹な, 泥臭い生活ではありましたが, 今では, 「価値ある寄り道」だったと思っています。この小稿が, 若手弁理士の皆様が進むべき道を考える際に, 何らかの刺激になれば幸いです。

1. 無謀な決心

私がアメリカのロースクoolへの留学を決意したのは, 33歳の夏。弁理士になって4年目, 上の娘が3歳, 下の娘が1歳の時だ。大学卒業後, 一貫して知財の仕事をしてきたが, 中でも, 海外出張をして, 特許ライセンス等の難しい契約案件をまとめることに, 男のロマンを感じていた。外国企業との契約交渉の場では, 相手の考えていることを察知し, 先を読み, 相手と駆

け引きすることが重要になる。私は, 知識・経験・語学の面で, 一枚も二枚も自分をブラッシュアップする必要性を痛感していた。また, 日本企業が, ずるがしこいアメリカの弁護士に手玉に取られたり, アメリカでの特許訴訟でコテンパンにやっつけられたりすることを, 何度となく目の当たりにしてきた。「よし, 目指すは国際派弁理士! 日本の中小企業の味方になり, 世界を飛び回って, 外国企業と対峙したい。」と, 大きな目標を掲げた。そのためには, まずは敵の懐にもぐりこみ, 彼らの生活, 仕事のやり方, 考え方を探らねば。まずは敵と同じ土俵に立ち, 敵を知ることが第一歩と考えたのだ。

と, 書くと, いかにも高い志で留学に踏み切ったように聞こえるが, 実は, アメリカに行くことは, ずっと前からのあこがれであった。小学生の頃, テレビで「アメリカ横断ウルトラクイズ」という番組がやっていた。「アメリカに行きたいかー?!」という司会者の掛け声に, 参加者全員「ウォー!」と答える。クイズに勝ち残った者だけが, 次の町まで行くことが許され, 何週間もかけてニューヨークまでたどり着く。そこでは, アメリカは, とても遠くて, 価値ある国に描かれていた。大学4年の時, 初めての海外旅行で, ロスの郊外の砂漠の中の小さな町に1ヵ月間ホームステイした。道端に生えている草を触って, 「おお, アメリカの草だー。」と感激した。ステイ先のマザーと, 日本人2人で車に乗っていた時, 道路の凸凹で急に車が揺れた。瞬間, 私達日本人2人は「おっとー!」と叫んだが, 彼女は「ウップス (Oops) !」という奇妙な言葉を発した。同じ人間なのに, 条件反射的に出る言葉がこんなに違うなんて, と私はすごく感動した。その後, 会社に就職し, アメリカのいろんな町に出張で行くようになった。3ヵ月間の短期留学で, カリフォルニア大学のサマースクoolに参加したこともあった。しかし, 私は, まだまだ物足りなかった。もっと, アメリカの

奥底を感じたかった。広大な大地の上で、アメリカ人と一緒に生活をしてみたかった。未知なる世界へ冒険に出てみたかったのだ。

ただ、その当時、私には留学のスポンサーはなく、行くとなると私費留学ということになる。周りの人間からは「それはむちゃだ。収入ゼロの上に、1年間の生活費。ダブルのコストになる。」と反対された。しかし、自分が今後弁理士としてやっていく上で、今行かなかつたら、将来きっと後悔するだろうという予感がした。ある日、流暢な英語をしゃべる外国帰りの弁理士が自分の前に現れて、「くそー、俺もあの時行っておけばよかった〜。」と、地団駄を踏むのが目に見えた。それに、今はまだ子供が小さく、動きやすい。数年後、子供が学校へ通うようになった後では、子供の教育に支障が出るという理由で渡航を断念するかもしれない。おそらく、今が最初で最後のチャンスだと思った。妻には、機会あるごとに、「ロースクールを出て、アメリカで実務経験を積み、英語が上達して、その上アメリカの弁護士資格でも取れば、ばら色の人生！」と、巧みに口説いて、その気にさせていた。

2. 旅の支度、ワン・ツー・スリー

日本の弁理士がアメリカで勉強する場合、選択肢としては、ロースクール、語学学校、法律事務所にトレイニーとしておいてもらう等がある。また、ロースクールにも、正規の3年のコース(JD)、1年のマスターコース(LLM)、聴講生やサマープログラム等がある。アメリカ人弁護士と同一の土俵に立つことを目指すなら、JDに行くべきだ。しかし、JDに入学するには準備が大変であり、なんとといっても、3年間の学費と生活費を工面することは不可能であった。幸いなことに、私は法学部出身だったので、LLMコースを選択した。LLMでは、卒業後も1年間はプラクティカルトレーニングとして働けるし、ニューヨーク州等では司法試験(Bar Exam)の受験資格もある。ちなみに、理系出身者を受け入れてくれる1年のマスターコースを提供するロースクールもある。(例えば、ニューハンプシャー州のフランクリンピアスがそうである。)

ロースクール入学の主な選考基準は、自己アピールのレター、推薦状、英語の試験(TOFLE)の成績だ。有名大学に入るには、TOFLEでかなりの高得点(610~630)を取らないと、足切りされる。また、そういう

大学では、多額の寄付をしている企業のための優先枠や、政府からの留学生の枠等があり、一般からの受け入れ枠は少ない。しかし、各大学とも、LLMコースには、世界中からなるべく多種多様な人種とバックグラウンドをもった学生に集ってもらうことを望んでいる。従って、知的財産法に力を入れている大学の場合、日本の弁理士資格を持っているとか、豊富な実務経験があることは、確実に有利だ。おそらく、TOFLE560~570点位でも、受け入れてくれる大学は見つかると思う。

留学の準備は1年位必要だ。大学の情報を集めたり、推薦状を頼むため母校の教授を訪ねたり、2ヶ月に1回のTOFLEで良い点を出すため特訓したりと、色々雑用で忙しい。TOFLE用の英語学校には、留学カウンセラーがいて、色々相談に乗ってくれる。私は、卒業後もアメリカにとどまり、働くつもりだと言ったところ、「あなた、すし握れますか？」と聞かれた。すしを握れるとアメリカで働き口に困らないというのだ。そのカウンセラーは、すし職人のバイトをしながら、アメリカに滞在していたという。

私の場合、さえないTOFLEの点数にもかかわらず、豊富な社会経験をアピールし、今後勉強したいことや将来の夢を思いっきり誇張して書いたところ、10校願書を出したうち、6校から合格通知が来た。自己アピールをする者が報われる国なのだ。その中から、カリフォルニア州のシリコンバレーにある、サンタクララ大学という小さな大学を選んだ。特許法の権威、チザム教授がそこで教えていたから、そして、そこがカリフォルニアだったからだ。せっかくの海外生活、家族には青い空の下で、伸び伸びと生活してもらいたかった。

3. トランク5つでレッツゴー!

先立つものはやはりお金。アメリカのロースクールの学費はとても高い。サンタクララ大学の1年間の学費は、当時22,000ドル、学費の安い州立大学でも、14,000~18,000ドルした。今年留学に行く方に聞いたところ、最近では、州立大学でも20,000ドルを超えているという。あとは1年分の家賃と生活費だ。

「1年間で、400~500万円あれば十分。」という友人の言葉を鵜呑みにして、それ位ならばと、全ての貯金を引き出し、子供の学資保険まで解約し、家財道具を売り払い、お金を用意した。しかし、現実にはその2

倍はかかった。家族を引き連れての留学で、しかも選んだところが、IT バブル真っ盛りのシリコンバレー。渡米後すぐ、私は自分の計算の甘さを痛感したが、もう後の祭りだ。

なにはともあれ、1997年の夏、私達家族4人は成田空港に立っていた。家具を送るお金などあるはずもない。身の回りのものを押し込んだ馬鹿でかいトランク5つと、片道航空券だけを持っていた。トランク5つからの出発だ！

4. シリコンバレー狂騒曲

サンノゼに着いて、すぐトラブルに見舞われた。レンタカーが出払って1台もない。そして、ホテルの部屋がどこも満杯で、空き部屋を探すのに3時間かかった。「シリコンバレー」という言葉に、緑の山に囲まれた静かな峡谷をイメージしていた私達は、真っ青になった。まるでそこは現代のゴールドラッシュ。世界中から一攫千金を狙ったコンピュータエンジニアが集まり、日々の話題は、「eCommerce」「投資」「株」「ベンチャー」「ストックオプション」... 皆、money, money, more money! と叫んでいた。私たちが借りた2ベッドのアパートは、家賃18万円、最近2年で1.5倍に跳ね上がったという。しかも、線路のすぐそばで、電車が通ると、味噌汁が揺れた。「車を買うなら絶対日本車」という友人の忠告を忘れ、安いアメ車を買って大失敗。故障、トラブルの連続で、ある時は、走っているときにオーバーヒートして煙がモクモク、あやうく一家全滅の危機に見舞われた。しかも、その年の年末、山一証券の倒産を機に急激な円安となり、一時146円まで下がった。日本の銀行から少しずつ送金していた私はまるで裏目だ。学費高、物価高、円安のトリプルパンチに見舞われて、1年分の予算を半年で使い果たしてしまった。週末ごとに旅行に出かける駐在員の友人家族を横目に、私達はなるべくジーンと動かずにいた。買い物好きの妻にとっては、1、2ヵ月に1回、アウトレットモールに行くことだけが楽しみだ。「息を潜めて生きているような感じね。」「アブラムシみたい。」私と妻は笑った。

5. ロースクールの授業

「グッドアフタヌーン！」いつものチザム教授の陽気な声が教室に響き渡る。教授が今日の判例の事実関

係の解説を始めると、学生は皆、自分の手元のラップトップコンピューターを使ってパタパタとメモを取る。教授が何か言い間違えると、学生皆、いっせいにデリートキーをたたく。さすが、ハイテクの町、机には個人用の電気のコンセントがついており、学生のほとんどは、パソコンでノートを取る。突然、学生の1人が手を挙げ、自分の意見をしゃべる。教授がそれに答える前に、今度は別の学生が、それについてしゃべり始める。にわかには、教室の中でディスカッションが始まる。教授は適当なところで、ポイントを整理し、議論が脱線しないように気を配る。ロースクールでは、通常、ケースブックといわれる判例をよせ集めた電話帳ほど分厚いテキストを使う。学生は事前に50-100ページ位予習してくることを要求され、その事件についてあれこれ議論しながら授業が進んでいく。手元の座席表を使って学生を指名し、その事件の事実関係や要点等を発表させる教授もいる。教授が解説するのを学生が静かに聞いている日本の大学とは大違いだ。

私の行ったロースクールでは、LLM 学生専用のクラスというのはなく、通常の JD の学生に混じって授業を受けた。JD の1年生用の必須科目は、授業がものすごくきつらしい。私は、マニアックな知的財産法関係の科目を中心に、前期3科目、後期5科目を取った。日本人留学生にとっては、やはり授業を聞き取れるかどうかの問題だ。この点、機関銃のように早口でしゃべる教授のクラスは選択しないようにした。しかし、教授が一人でしゃべっているときはなんとかついていけても、学生同士で議論がはじまると、もうお手上げだ。しかし、慣れてくると、実は学生たちの発言はトンチンカンなものが多いのもわかってくる。また、判例法のお国柄か、テキストの中身にせよ、授業の中での議論にせよ、日本のように体系だったものではない。アメリカのロースクールでは、多くの事件を洪水のように浴びせて、学生の頭をわざと混乱させ、その中で何らかのルールを見出すことを訓練する場と言われている。実際、学生がその法律の全体像をつかむのは、卒業後、BarBri（司法試験の予備校）の授業の中だとも言われているのだ。

試験は、事例問題についての論文試験だ。テキストや自分のノートの持ち込みは許される場合が多い。留学生には1.5倍の試験時間が与えられ、1科目4時間半の長丁場だ。私の取った「エンターテイメント法」の

場合は、試験の代わりに論文を課された。せっかくだから日本らしいエンターテイメントの話題をとって、私は、「カラオケビジネスとそれにまつわる法的諸問題」という論文を書いた。これが意外にも教授に好評であった。また、卒業論文では、「Licensing to Japan」というタイトルで、得意分野である日米間の技術ライセンスに関し、双方の法律や文化の違いに根ざした誤解や紛争に焦点を当てて、大作を書いた。

私の印象では、まじめに勉強しさえすれば、日本の留学生が米国のロースクールで落ちこぼれることはないと思う。なによりも、仕事のことを気にせず、一日中好きな勉強をしていられるのは喜びであった。アメリカ人の若い学生に混じって、ジーンズにバックパックを背負い、片手にコーヒーを持って、図書館で判例の検索なんかをしていると、「勉強って楽しいもんだ」とつくづく実感した。

6. アメリカで就職するぞ！

私の場合、身銭を切ってやって来たので、たった1年の留学だけで帰っては元が取れない。しかし、アメリカでどうやって仕事を見つければいいのか、皆目見当がつかなかった。アメリカの法律事務所で働いている日本人は、ほとんどがコネのある日本の企業や事務所から研修生として派遣されていた。給料は元の日本企業や事務所が払っている。全くコネのない私を、まともな給料で雇ってくれる企業や事務所が見つかるだろうか？ 私は、思いきって、アメリカの事務所で働いている、ある日本の弁理士の先生に電話をかけてみた。「仕事？ うーん、全然ないね。10年くらい前は、日本人ということだけで雇ってくれるところもあったんだけどね。最近ではさっぱり。日本の弁護士なんかも、留学の後仕事を探すんだけど、結局なくてそのまま帰ってるよ。」ということだった。サンノゼの日系の人材紹介会社にも聞いてみた。「法律の仕事ねー。聞いたことないわねー。エンジニアか秘書の仕事ならたくさんあるんだけどねー。」これはもう、とにかく片っ端から当たって砕けるしかないとした。こうして、私の就職活動、「下手な鉄砲数うちや当たる作戦」が始まった。

秋頃から始まるキャンパス内での就職説明会にはほとんど出席し、各法律事務所のブースを訪れて、売込みをかけた。毎日図書館に通い、日刊の法律新聞に載っている求人欄の企業や事務所に履歴書を送り続けた。

大学の就職課からOBの弁護士を紹介してもらい、サンフランシスコやパロアルトの事務所を訪ねてみた。しかし、全く反応がない。当たり前だが、会社や事務所の看板背負って生きていた時代とは、今は違う。個人としての自分の非力さを思い知る毎日だった。「まあ、数打ちゃ当たるさ。次行こう、次！」あるときは、風邪でかかったお医者さんに法律事務所で働く人を紹介してもらい、遠くまで出かけていった。カリフォルニアだけでなく、全米の日系人材会社の全てに登録し、探してくれるよう頼み込んだ。その中で、ニューヨークの人材会社の社長が、知り合いのお客さんが特許や法律のできる人を探しているようだという情報をくれた。それは、帰国する航空券を買うお金も残っていなかった私達家族にとって、まさに天国に上る蜘蛛の糸のような話であった。

7. アメリカで働くこと

ロースクール卒業後、私達家族はニュージャージー州プリンストンに移った。研究所には、インド、中国、ドイツ、ロシア、セルビア、韓国等々、世界各国からPh.D.をもった優秀な研究者が集まっていた。言語や文化、食生活にいたるまで全く異なっており、お昼時のカフェテラスでは、色々なスパイスのにおいが立ち込める。専属の法務担当者はおらず、私が法務セクションを立ち上げることになった。主な仕事は、特許、契約、ビザ・移民法関係だ。全く異なる背景を持つ研究者を相手に、「論文投稿前に特許出願を」云々と説いて回るのは骨が折れる。彼らは、将来の自分のステップアップを考えた場合、今の会社の組織よりも、社外の同一民族間のネットワークの方がより重要だ。特許の保護を主張することで、同じインド人の大学の教授との関係が悪くなることを極度に嫌がることも多い。また、ITバブルの頃は、シリコンバレーのベンチャー企業に転職する者が多く、バブルがはじけると、今度はレイオフで、多数の研究者が解雇された。人の流動性が激しいのは特許担当者泣かせだ。発明者が、発明完成後、特許出願前に辞めてしまい、宣誓書のサインをもらうため、その居場所を探し回ったり、特許庁からオフィスアクションが届く頃は、発明者が皆いなくなってしまう、誰もその技術がわからないとか、問題が頻発した。また、ベンチャー企業を立ち上げたものの、たった1年でつぶれてしまったことがあった。会社と

しては残念なことだったが、私にとっては、会社の立ち上げ、ストックオプションの契約、知財の価値評価、解散後の借金取りへの対応等、さまざまな業務に携わることができ、貴重な経験になった。

日本で、「あなたは何の仕事をしているの?」と聞くと、「〇〇株式会社に勤めています。」と答えるが、アメリカの場合は、「Computer Engineer です。」とか、「Accountant です。」とか、職種で答える。日本は組織が前面に出るが、アメリカでは個人が出る。秘書として入社すれば、ずっと秘書であり、人事担当者はずっと人事部、社長は他の会社に移っても、また社長をやっている。日本のように、法務担当者が営業マンになったり、人事担当者が広告部に移ったりすることはありえない。職種を変えたい場合は、もう一度その種の学校で勉強してこなくてはならない。そういう意味では、日本以上に学歴社会であり、職種の転換が難しい。各人、その分野のプロフェッショナルであることを誇りに思っており、当然、職種によって給料が違う。ちなみに、アメリカでは、戸籍というものが無い。家族という組織を表す「家」という制度はなく、背番号(Social Security Number)を持った個人がいるだけだ。

8. アメリカの特許事務所

3ヶ月に1回程度、ニューヨーク近辺の日系企業の特許・法務担当者が集まって勉強会と懇親会を開いた。アメリカの特許事務所の料金の高さには、皆でよく愚痴を言い合った。アメリカでは、一般に、医者や技術者等のエキスパートによる人的サービスは、料金が高い。弁理士の中でも、特許弁理士は、「技術」と「法律」という、通常人間が持ち得ない2つの特技を持っているということで、特に高い。日系企業が依頼している、ニューヨークやワシントンDCの大事務所では、新規出願1件につき、平均15,000ドル位請求する。価格競争に巻き込まれている日本の状況と比べると、なんともうらやましい話だ。しかし、著名な大事務所がいつも良い仕事をするとは限らない。若い弁理士が、簡単な新規出願に100時間以上費やして、22,000ドルの請求書が届いたことがある(これは、さすがに文句を言って、半額にしてもらったが)。日本企業は、アメリカの事務所を選ぶ際、ブランド志向が強いのかもしれない。アメリカ人の弁理士には、マンハッタンのど真ん中でバリバリやりたい派と、田舎で家族とのんびり

りやりたい派に分かれる。田舎にも、腕のいい安い特許弁理士はたくさんいるはずだ。

9. 出産と、テロと、司法試験と

ニュージャージーに移り、定職にも就き、ほっと一息ついたのもつかの間、妻の妊娠が発覚した。三人目だ。「貧乏子だくさん」とはよく言ったもの。出産の時、私は妻の左足を押さえる係だった。夫婦がまさに力を合わせて子供を誕生させるという貴重な体験をした。

その三女が1歳になった頃、あのテロ事件が起こった。ある朝、出社すると、ラジオのニュースがガンガン鳴っており、所長の秘書が「アタックされた、アタックされた!」と騒いでいる。皆が群がっているテレビを覗くと、先日家族と展望台上ったツインタワーが煙を吐いているではないか。そして、「collapse」のテロップ。「collapse って、崩壊? えー!」崩壊したビルの白い煙がマンハッタン島全土を覆い尽くす映像が流れた。テレビを見ている何人かのアメリカ人の女性は、涙を流している。私はすぐに水と非常食を買いに走った。その後、半年間、ニューヨークには近づけなかった。冬になった頃、ハドソン川の近くに行く用事があった。いつも見えていた方角を探しても、やはりビルはない。なんともいえない空虚感で胸が疼いた。

そのテロの余韻が消えないうちに、プリンストンでは、炭疽菌事件で大騒ぎになった。問題の手紙を集配したハミルトンの郵便局というのは、実は、うちの家を管轄する郵便局だった。「もう年賀状も出せない!」取材に来た記者に語った私の妻の言葉が、読売新聞の全国版の見出しに踊った。毎日、使い捨ての手袋をはめて郵便物に触る日々が続いた。

そういう戦いが続いている中、私にとっての最大の戦いは、ニューヨーク州の司法試験であった。ニューヨーク州は、外国で法律を学んだ者にも受験の機会を与える一方、試験自体は全米で最も難しい。特に、最近、質の悪い外国人受験生を排除しようとしているのか、合格基準点を引き上げたり、外国人が苦手とする短時間内に多量の資料を読ませ、分析し、論文にまとめるという試験(パフォーマンス試験)を取り入れた。通常、アメリカ人の学生は、ロースクール卒業後すぐに受験するのだが、私の場合、まずは、働いて収入を得て、ニュージャージーで家族が生きていける生活基盤を作る方が先決だった。しかし、技術ライセンスの

仕事は、弁護士と弁理士の境目のような仕事。外国とのライセンス交渉の中で、いかに自分が大きな立ち回りを果たせるかを考えた場合、米国の弁護士資格は、やはり欲しかった。せつかく受験資格を得たのだから、もうひとふんばりして、今までの苦労の元をとるか、と気合を入れ直すことにした。子供が寝静まった後、明け方近くまで BarBri のテキストと格闘した。日本の弁理士試験と比べて、英語であることを除けば、内容的にはたいしたことはない。しかし、なんといっても、科目が多く、覚えることが多すぎる。弁理士試験時と比べて、集中力の鈍っている自分にいらだった。

そして、勝負の夏。前回は、わずか3点足らずで落ちた。今回の試験は、見たこともないような難しい問題ばかりで、全く手ごたえはなかった。試験会場で、60歳半ばのおばあさんがブルージーンズをはき、会場前の廊下にあぐらをかいて、テキストを読みふけているのには感動した。試験発表の日、夜中の12時ジャストにインターネットで発表される。今回落ちたらどうしようと思い、なかなかコンピューターのスイッチを入れる勇気が出ない。そのままウトウトと眠ってしまった。早朝、妻が浴びるシャワーの音で目を覚ました。私は、重〜い気持ちでスイッチを入れ、サイトを開いた。名前があるとしたら、「R」のセクションの一番最後の場所だ。ページをずーっとスクロールダウンしていった。アルファベットの名前が、ザーと流れていく。心臓の音が、全身から聞こえてくる。マウスを持つ手が震える。ページが止まった。一番下の名前を見た。私の名前ではなかった。「ない。やっぱりない…」だが、画面右の下向きの矢印の上に、ほんのわずかなスペースが残っていることに気がついた。私はその矢印を「プイ」とクリックしてみた。そうすると、「Ryujin, Yoshihiko」のアルファベットが、ページの下からの「ポコッ」と、浮き出てきた。私は一瞬画面に釘付けになり、「ウオー!!」と叫んで、バスルームに駆け出した。シャワーカーテンを開け放ち、「あったよ、あった！うかったよー!!」と叫んだ。妻は、シャワーを放り投げてバスルームから飛び出し、コンピューターの画面にこれまた釘付けになった。妻のあごからシャワーの水が滴り落ちていた…。

10. 帰国して思うこと

帰国後、もうすぐ1年半が経つ。アメリカで生まれた三女も、もうすぐ4歳だ。私たちがアメリカに滞在している間に、日本の知財や弁理士をめぐる環境が大きく変わった。弁理士法の改正の際は、私も海の向こうで固唾を飲んで進展を見守った。ライセンス業務も業務範囲にはいったのは、私にとってはまさしく「渡りに舟」だ。インターネットで垣間見る日本の新聞に、「知財戦略」「特許の活用」の文字が乱れ飛んでいた。こんな面白そうな状況の中で、今、自分が日本にいないことが悔しかった。ニュージャージーのコーン畑の中で、のんびりパンプキン取りをしている場合ではない。「帰るぞー！」私は、家族に号令をかけた。

弁理士が米国ロースクールへ留学するメリットがあるかと聞かれれば、Oh! YES と答えたい。私の場合、米国での留学経験、実務経験、弁護士資格は、アメリカにいるとき考えていた以上に、日本で役に立っている。今の事務所で新規事業として始めた、ライセンスや契約業務も軌道に乗ってきた。また、長く異文化の中で生活したことで、仕事や人生、家族に対するものの見方に広がりが出た。「こうでなくてはならない」と思うとき、もしかして、そんなことはどうでもよいと考える人がいるのではと思えるようになると、肩の力が抜ける。家族とは、七転八倒の6年間を一緒に戦った戦友のような関係にもなれた。

弁理士は、プロフェッショナルとして、いろいろな場面で自己を表現できる素晴らしい仕事だと思う。自分の持ち味や長所を、積極的に自己表現すればきっとうまくいくような気がする。留学や海外勤務は、弁理士としての自分の表現力を豊かにする貴重な体験だ。迷っている人には、後ろから背中を押してあげたい。

「ロースクールも出たし、アメリカで長く働いたし、弁護士にもなれたし、英語も多少うまくなった。とりあえず、行く前に約束したこと、全部果たしたよなー。」私がビール片手に上機嫌で妻に言った。家計簿を付けていた妻がキッと顔を上げ言った。「で、バラ色の人生ってのは、どうなったの？」

(原稿受領 2004.7.1)